

平成17年度病害虫発生予報第5号

平成17年7月7日
鳥取県病害虫防除所

予報の概要 [参考]

区分	農作物名	病害虫名	発生時期	予想発生量
普通作物	イネ	葉いもち	やや遅い	やや少ない
		穂いもち	平年並	やや少ない
		紋枯病	平年並	やや多い
		縞葉枯病 (ヒメトビウンカ)	平年並	やや少ない
		セジロウンカ	やや遅い	平年並
		斑点米カメムシ類 イチモンジセセリ	平年並 やや早い	やや多い 平年並
果樹	ナシ	黒斑病	-	やや少ない
		黒星病	-	やや少ない
		輪紋病	平年並	平年並
		クワコナカイガラムシ	平年並	やや多い
	カキ	ハダニ類	平年並	やや多い
		炭疽病	やや遅い	やや多い
リンゴ	ハダニ類	平年並	やや多い	
	果樹共通	カメムシ類	平年並	やや少ない
野菜	ネギ	さび病	平年並	やや少ない
		黒斑病	平年並	平年並
		白絹病	平年並	やや多い
		軟腐病	平年並	やや多い
		ネギハモグリバエ	平年並	やや多い
		ネギアザミウマ	平年並	やや多い
	スイカ	つる枯病・炭疽病	平年並	平年並
		うどんこ病	平年並	平年並
		褐色腐敗病、疫病	平年並	平年並
		アブラムシ類	平年並	やや多い
	イチゴ	ハダニ類	平年並	やや多い
		うどんこ病	平年並	平年並
炭疽病		平年並	平年並	
アブラムシ類		平年並	平年並	
ナガイモ	炭疽病	平年並	平年並	

気象予報 (抜粋)

1か月予報 (7月2日～8月1日: 7月1日、広島地方气象台発表)
向こう1か月の気温は高く、降水量と日照時間はいずれも平年並の見込みです。

<可能性の大きな気温経過>

期	間	平均気温
7月	2日～7月8日	平年並
7月	9日～15日	平年並か高い
7月	16日～29日	平年並か高い

普通作物

[イネ]

1 葉いもち

(1) 予報の内容

発生地域	県下全域
発生時期	やや遅い
発生量	やや少ない

(2) 予報の根拠

- ア 6月第6半旬に行った定点調査では、本病の発生は確認できなかった（平年発生ほ場率4.2%）。
- イ 7月5日現在、山間部の一部ほ場で発生がみられているが、広域的な発生とはなっていない。
- ウ プラストム（いもち病発生予察システム）による感染好適日が7月1～3日および5日に広域的に認められた。
- エ 県発生予察ほ場におけるイネのでんぶん蓄積率は平年並である。
- オ 気象予報によると、向こう1か月の気温は高く、降水量は平年並と予想されており、本病の発生を助長しない。
- カ 長期効果持続型育苗箱施用剤が広く普及している。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 補植用置き苗を放置しているほ場では、置き苗を直ちに処分する。
- イ 長期効果持続型育苗箱施用剤を使用しているほ場でも、山間地、常発地などでは十分な効果が得られない場合があるため、ほ場の観察を徹底し、早期発見に努める。
- ウ 上位葉に急性型病斑がみられるようであれば、直ちにカスラブサイド粉剤3DL（同水和剤）、ブラシン粉剤DL（同水和剤）等で防除を行う。

2 穂いもち

(1) 予報の内容

発生地域	早期栽培地域
発生時期	平年並
発生量	やや少ない

(2) 予報の根拠

- ア イネの生育速度はほぼ平年並である。
- イ 葉いもちの発生量はやや少ないと見込まれる。
- ウ 気象予報によると、向こう1か月の気温は高く、降水量は平年並と予想されている。また、出穂期から穂揃い期にあたる8月は、晴れの日が多いと予想されており、本病の発生を助長しない。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 予防防除を基本とし、粉剤又は液剤を使用する場合は、穂ばらみ期の防除を必須とする。粒剤を使用する場合は、各薬剤の使用基準を確認して水面施用する。
なお、葉いもちの発生が多い場合や曇雨天が続く場合は、穂揃い期の追加防除を行う。
- イ 葉いもちの発生に注意し、ほ場をよく観察して早期発見に努め、上位葉に急性型病斑がみられるようであれば、直ちにカスラブサイド粉剤3DL（同水和剤）、ブラシン粉剤DL（同水和剤）等で防除を行う。

3 紋枯病

(1) 予報の内容

発生地域 県下全域
発生時期 平年並
発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

- ア イネの茎数はやや多く推移している。
- イ 去年の発生量は多く、越冬菌核量が多いものと推測される。
- ウ 気象予報によると、向こう1か月の気温は高く、降水量は平年並と予想されており、本病の発生を助長する。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 幼穂形成期から出穂直前までに1～2回の防除を行う。なお、コシヒカリでは出穂期前15～20日の発病株率が25%、穂ばらみ期の発病株率が18%を要防除の目安とする。
- イ 昨年発生が多かったほ場では、越冬菌核量が多いものと推測されるため注意する。

4 縞葉枯病（ヒメトビウンカ）

(1) 予報の内容

発生地域 県下全域
発生時期 平年並
発生量 やや少ない

(2) 予報の根拠

- ア 6月下旬現在、予察灯へのヒメトビウンカ誘殺数はやや少ない。
- イ 6月末の定点巡回調査では、本病の発生は認められなかった。
- ウ 去年の本病の発生は少なかったため、伝染源は少ないものと見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 縞葉枯病の常発地で、イミダクロプリド剤（ブイゲットアドマイヤー粒剤など）又はフィプロニル剤（Dr.オリゼプリンス粒剤10など）を含む薬剤の育苗箱施用を行っていない場合には、トレボン粉剤DL（同粒剤）、ジノテフラン剤（アルバリン粒剤/スタークル粒剤）などを用いて、7月上旬にヒメトビウンカの防除を行う。
- イ 本虫は葉色の濃いほ場に発生しやすいので、窒素過多にならないようにする。

5 セジロウンカ

(1) 予報の内容

発生地域 県下全域
発生時期 やや遅い
発生量 平年並

(2) 予報の根拠

- ア 予察灯における初飛来は6月25日（平年：6月第4半旬）で平年と比較してやや遅い。
- イ 6月第6半旬現在、予察灯の誘殺数はやや少ない。
- ウ 気象予報によると、向こう1か月の気温は高く、降水量は平年並と予想されており、本虫の発生を助長する。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 現在防除の必要はないが、今後、梅雨前線の活発化に伴い多飛来も予想されるので、ほ場における生息密度及び発生予察情報に注意する。
- イ 防除適期は、7月中～下旬になるものと予想される。この時期の防除要否の目安は1株当たり10頭以上である。

6 斑点米カメムシ類

(1) 予報の内容

発生地域	早期栽培地域
発生時期	平年並
発生量	やや多い

(2) 予報の根拠

- ア 6月下旬現在、イネの生育は平年並に推移している。
- イ 県東部の定点雑草地では、斑点米カメムシ類が平年に比較してやや多くすくい取られている。また、予察灯ではカスミカメ類が平年より多く誘殺されている。
- ウ 気象予報によると、向こう1か月の気温は高く、降水量は平年並と予想されており、本虫の発生及び加害をやや助長する。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 出穂20日前頃に1回目の草刈りを行ない、その後、イネ科雑草が穂をつける前に再度刈り取りを行う。草刈りは地域で一斉に行うと効果が高い。なお、出穂期前後に水田周辺の雑草地・畦畔等の草刈りを行うと、雑草地等で増殖したカメムシ類を水田に追い込む結果となるので避ける。
- イ 水田及び周辺雑草地にカメムシ類の発生が多いほ場では、穂揃い期～乳熟初期に防除指針に従って薬剤防除する。その後も発生の多い場合は、7～10日間隔で追加防除を行う。
- ウ 昨年、斑点米の発生が多かった地域では斑点米カメムシ類の越冬密度が高い可能性があるので注意する。

7 イチモンジセセリ(イネツトムシ)

(1) 予報の内容

発生地域	県下全域
発生時期	やや早い
発生量	平年並

(2) 予報の根拠

- ア 6月下旬現在、本田における幼虫の発生量はほぼ平年並である。
- イ 気象予報によると、向こう1か月の気温は高いと予想されており、本虫の生育をやや促進する

(3) 防除上注意すべき事項

- 発生が多いほ場では、第2世代幼虫の発生初期(7月中旬～8月上旬)に、防除指針に従って、粉剤又は粒剤を散布する。

果 樹

【ナ シ】

1 黒斑病

(1) 予報の内容

発 生 量 やや少ない

(2) 予報の根拠

ア 6月17日に調査した幼果の除袋調査の結果によると、県内の平均発病率は0.4%（平年3.1%）であった。また、徒長枝葉の平均発病率は0.8%（平年1.4%）であり、いずれも平年を下回った。

イ 気象予報によると、向こう1か月の降水量は平年並と予想されており、新梢葉の発病の増加が予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 梅雨期間中の降雨により徒長枝葉の発病が増加するので、梅雨明けまでは防除間隔を7～10日とし、徒長枝葉の発病の多い園では追加防除を1～2回行う。

イ 防除薬剤は、アントラコール顆粒水和剤500倍液、アリエッティC水和剤800倍液、アミスター10フロアブル1,000倍液などを使用する。

ウ 園内の風通しをよくするため、下草の管理を徹底する。

2 黒星病

(1) 予報の内容

発 生 量 やや少ない

(2) 予報の根拠

ア 6月下旬現在、現地における本病の発生量は平年に比べてやや少ない。

イ 気象予報によると、向こう1か月の降水量は平年並と予想されており、今後、葉や幼果の発病はやや増加すると予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 梅雨期間中の降雨により発病が増加するので、梅雨明けまでは防除間隔を7～10日とし、発病の多い園では追加防除を1～2回行う。

イ 防除薬剤は、ベルコートフロアブル1,500倍液、アミスター10フロアブル1,000倍液などを使用する。

3 輪紋病

(1) 予報の内容

発生時期 平 年 並

発 生 量 平 年 並

(2) 予報の根拠

ア 伝染源は枝のいぼ病斑であり、ナシ園によっては発生の多いところがある。

イ 気象予報によると、向こう1か月の降水量は平年並と予想されており、孢子飛散数の増加が予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 果実の発病は有袋栽培でほぼ防げるが、袋掛けが遅くなると発病が多くなるので早めに袋掛けを行う。また、無袋栽培では梅雨明けまでの薬剤防除を徹底し、追加防除を1～2回行う。

イ 防除薬剤は、ベルコートフロアブル1,500倍液、キャプレート水和剤600倍液、アリエッティC水和剤800倍液、オキシラン水和剤600倍液、アミスター10フロアブル1,000倍液などを使用する。

4 クワコナカイガラムシ

(1) 予報の内容

発生時期 平年並
発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 第1世代幼虫のふ化がほぼ平年並の7月6日(平年:7月4日)に認められたことから、第1世代幼虫のふ化最盛期は、平年並の7月第2~3半旬(平年:7月8日)と見込まれる。

イ 前年度、本害虫による果実被害はやや多かったので、越冬密度はやや高いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 多発園では次の時期を目安に2回の防除を行う。

幼虫ふ化最盛期 7月 8~13日

幼虫ふ化終期 7月14~19日

なお、少発園では7月10日前後に1回防除を行う。

イ 薬剤はスミチオン乳剤1,500倍液、モスピラン水溶剤4,000倍液、ダズバン水和剤25の1,500倍液などを使用し、連用を避けて輪番散布する。

ウ 薬剤の散布にあたっては、カイガラムシが集合する枝葉の他、枝の切り口、粗皮などにも十分にかかるようにする。

5 ハダニ類

(1) 予報の内容

発生時期 平年並
発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 6月下旬現在、県予察圃場におけるカンザワハダニの1葉当たりの寄生虫数は、0頭(平年:0頭)と、ほぼ平年並の発生量となっている。

イ 網掛け栽培を中心に、ハダニ類の密度が増加しているほ場が一部認められる。

ウ 気象予報によると、向こう1か月の気温は高く、降水量は平年並と予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 例年、ハダニ類の密度は、梅雨明け以後の高温乾燥条件下で急激に高まるので、1葉当たりの成虫数1頭を目安に防除を行う。

イ ハダニ類は、種類によって薬剤効果が異なるので、種類を十分に見極める。また、薬剤の散布にあたっては、連用を避けて、輪番散布する。

ウ カンザワハダニ、ナミハダニにはバロックフロアブル2,500倍液、コロマイト乳剤1,500倍液、カネマイトフロアブル1,500倍液などを、クワオオハダニには前述の剤に加えて、ダニトロンフロアブル1,500倍液などを使用する。

エ ナシ園の下の草は、ハダニの発生源となるので草刈を励行する。

[カキ]

1 炭疽病

(1) 予報の内容

発生時期 やや遅い

発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 6月までの降水量が少なかったため、本病の発生は例年に比べてやや遅れている。

イ 前年の多発園では、越冬菌密度が高いことが予想される。

ウ 気象予報によると、向こう1か月の降水量は平年並と予想されており、発病の増加が予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 防除薬剤は、7月上～中旬にマンゼブ水和剤（ジマンダイセン水和剤600倍液またはペンコゼブ水和剤600倍液）を使用する。

イ 新梢や幼果の発病は降水量と関係が深く、10日間の雨量が100ミリ以上に達すると発病が増加する。

ウ 発病が認められた新梢や幼果は園外に持ち出す。

[リンゴ]

1 ハダニ類

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 6月下旬現在、県予察圃場ではリンゴハダニの発生がみられており、発生量はほぼ平年並である。

イ 気象予報によると、向こう1か月の気温は高いと予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 例年、ハダニ類の密度は、梅雨明け以後の高温乾燥条件下で急激に高まるので、1葉当たりの成虫数1頭を目安に防除を行う。

イ 薬剤は、オサダンフロアブル2,000倍液、ダニトロンフロアブル1,500倍液、コロマイト乳剤1,500倍液などを散布し、連用を避けて輪番散布する。

ウ リンゴ園の下の草は、ハダニの発生源となるので草刈を励行する。

[果樹共通]

1 カメムシ類

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 やや少ない

(2) 予報の根拠

ア 予察灯におけるチャバネアオカメムシの6月の総誘殺数は、八頭町で14頭（平年：239.6頭）、大栄町で22頭（平年：66.6頭）、湯梨浜町で1頭（平年：45.2頭）と平年と比較して少ない。

イ 八頭町における集合フェロモントラップの6月のチャバネアオカメムシ総誘殺数は30頭（平11～16年：110.2頭）と平年と比較してやや少ない。

ウ カメムシ類の餌となるスギ・ヒノキの球果量が多いと見込まれることから、8月までのナシ園への飛来量はやや少ない～少ないものと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 例年、第1世代成虫が発生する7月下旬頃が果樹園への飛来量が増加する時期なので、定期的にはほ場を見回り、カメムシ類の飛来に注意する。特に、例年被害がみられる山際の園では観察を怠らないようにする。

イ カメムシ類の飛来が認められた場合は、ジノテフラン水溶剤（アルバリンまたはスタークル顆粒水溶剤）の2,000倍液などを散布する。

ウ カメムシ類の餌となるスギ・ヒノキの球果量が多いと見込まれることから、第2世代成虫が発生する8月下旬以降は、果樹園への飛来量が増加することが懸念される。

野 菜

[ネギ]

1 さび病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並
発生量 やや少ない

(2) 予報の根拠

ア 6月下旬現在のほ場における発生量はやや少ない。

イ 本病は、気温が24℃以上では発生が少なくなる。

ウ 気象予報によると、向こう1か月の気温は高く、降水量は平年並と予想されており、中山間地については引き続き、やや少ない発生量が見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

薬剤は、オンリーワンフロアブル1,000倍液などを散布する。多発している場合には、上記の薬剤にカリグリーン800倍液を混用して散布、またはアミスター20フロアブル2,000倍液の散布を行う。

2 黒斑病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並
発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 6月下旬現在の発生量は平年並である。

イ 本病は気温が25℃前後で、降雨が多い場合に多発する。

ウ 気象予報によると、向こう1か月の気温は高く、降水量は平年並と予想されており、平年並の発生量が見込まれる。

(2) 防除上注意すべき事項

ア 根傷み、肥料不足となると発病しやすいので、ほ場の排水を図り、肥培管理に注意する。

イ 薬剤は、ダコニール1000の1,000倍液、ポリベリン水和剤1,500倍液などを予防散布する。発病後は、ロブラール水和剤1,000倍液などを散布する。

3 白絹病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並
発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 6月下旬現在の発生量は平年並である。

イ 本病は高温多湿で発病しやすい。

ウ 気象予報によると、向こう1か月の気温は高く、降水量は平年並と予想されており、平年に比べやや多い発生量が見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 7月上旬の土寄せ前にモンカット粒剤の10a当たり4kgを株上から株元に散布する。または、モンカットファイン粉剤20DLの10a当たり10kg、フロンサイド粉剤10a当たり15kgなどを株元散布する。なお、粉剤は畝の両側から株元に散布を行う。

イ 7月中旬以降に発病がみられる場合は、モンカットフロアブル40の2,000倍液を株元に散布する。その後の発生には土寄せ前にリゾレックス粉剤10a当たり20kgなどを株元散布する。

4 軟腐病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並
発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 6月下旬現在の発生量は平年並である。

イ 本病は高温多湿で発病しやすい。

ウ 気象予報によると、向こう1か月の気温は高く、降水量は平年並と予想されており、平年に比べやや多い発生量が見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

ア ネギに傷が付くような無理な土寄せ、および追肥を行うと発病が助長されるので避ける。

イ 収穫1~2か月前の植付け後、2か月以上経過した株には7月上旬の土寄せ直前に、オリゼメート粒剤10a当たり6kgを散布する。

ウ 最終土寄せ前後にナレート水和剤1,000倍液、Zボルドーまたはヨネポン水和剤500倍液を7~10日間隔で2~3回散布する。

5 ネギハモグリバエ

(1) 予報の内容

発生時期 平年並
発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 6月下旬現在の発生量は、平年に比べてやや多い。

イ 気象予報によると、向こう1か月の気温は高く、降水量は平年並と予想されており、平年並~やや多い発生量が見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

防除薬剤は、アグロスリン乳剤2,000倍液、アクタラ顆粒水溶剤2,000倍液などを散布する。

6 ネギアザミウマ

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 6月下旬現在の発生量は、平年並である。

イ 気象予報によると、向こう1か月の気温は高く、降水量は平年並と予想されており、平年並～やや多い発生量が見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

防除薬剤は、ランネート45DF1,000倍液、オンコルマイクロカプセル1,000倍液、ガゼットMCフロアブル1,000倍液、アグロスリン乳剤2,000倍液、モスピラン水溶剤2,000倍液、アドマイヤーフロアブル2,000倍液、アクタラ顆粒水溶剤2,000倍液などを7～10日間隔で輪番散布する。

[スイカ]

1 つる枯病、炭疽病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 6月の降水量が少なかったため、6月下旬現在のつる枯病および炭疽病の発生量はやや少ない。

イ つる枯病および炭疽病は、降雨によって発病が増加する。

ウ 気象予報によると、向こう1か月の降水量は平年並と予想されており、平年並の発生量が見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 雨滴のあたる箇所または株元から発病するので、薬剤散布は株元およびトンネル外の茎葉に薬液が付着するよう丁寧に行う。

イ 雨の日が続くと発病が増加するので、散布間隔を短くし、雨のやみ間に防除する。

ウ 茎葉が濡れた状態での薬剤散布は、防除効果が低いので、できるだけ葉が乾いた状態で行う。

エ 薬剤は、アントラコール顆粒水和剤600倍、ダコニール1000の700倍液などを予防散布する。発病初期には、ポリベリン水和剤1,000倍液などを散布する。

2 うどんこ病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 6月下旬現在、本病の発生は平年並である。

イ 本病は、25前後の気温と乾燥条件で発病が増加する。

ウ 気象予報によると、向こう1か月の気温は高く、降水量は平年並と予想されており、平年並の発生量が見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

発生初期からトリフミン水和剤5,000倍液、ポリベリン水和剤1,000倍などを散布する。

3 褐色腐敗病、疫病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 6月の降水量が少なかったため、6月下旬現在の発生量はやや少ない。

イ 褐色腐敗病および疫病は、多雨によって発生が増加し、一度発生すると、急速に広がる。

ウ 気象予報によると、向こう1か月の降水量は平年並と予想されており、平年並の発生量が見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

ア ほ場の排水を良好にする。特に豪雨時には滞水のないように配慮する。

イ 毎年、疫病の発生する圃場では、ジマンダイセン水和剤400倍液、ホライズンドライフフロアブル倍液などを予防散布する。

ウ 多雨が続くとき、または集中豪雨の後にはリドミルMZ水和剤1,000倍液を散布する。

4 アブラムシ類

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 6月下旬現在、県予察ほ場（東伯郡大栄町）に設置した黄色水盤における有翅アブラムシ類の飛来量は、平年並に推移している。

イ 現地のスイカほ場における発生量は大型トンネルで平年並、前進中型トンネルでやや多い。

ウ 気象予報によると、向こう1か月の気温は高く、降水量は平年並と予想されており、引き続きやや多い発生量が見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

薬剤はアドマイヤー水和剤2,000倍液、マラバッサ乳剤1,500倍液などを散布する。

5 ハダニ類

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 6月下旬現在、現地のスイカほ場における発生量は、大型トンネルでやや少なく、前進中型トンネルでやや多い。

イ 県予察ほ場（東伯郡大栄町）での発生量は、やや多い。

イ 気象予報によると、向こう1か月の気温は高く、降水量は平年並と予想されており、やや多い発生量が見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

発生初期にはニッソランV乳剤の1,000倍液、マイトコーネフロアブル1,000倍液、バロックフロアブル2,000倍液、オサダンフロアブル2,000倍液などを散布する。発生が増加する場合は、コロマイト乳剤1,000倍液を散布する。

[イチゴ]

1 うどんこ病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 6月下旬現在、育苗床での本病の発生はやや多い。

イ 発病適温は20前後である。

ウ 気象予報によると、向こう1か月の気温は高いと予想されており、平年並の発生量が見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 本ばに病原菌を持ち込まないために、育苗期間中の防除を徹底する。

イ 防除にあたっては葉裏へも薬剤が付着するように丁寧に散布を行う。発病初期までの薬剤は、ベルコート水和剤1,000倍液、サンヨール1,000倍液などを散布する。

ウ 発病が多発している場合には、トリフミン水和剤5,000倍液、モレスタン水和剤4,000倍液、サンヨール1,000倍液などを交互に散布する。

2 炭疽病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 6月の降水量が少なかったため、6月下旬現在の育苗床での発生量はやや少ない。

イ 本病は高温多雨で発病しやすい。

ウ 気象予報によると、向こう1か月の気温は高く、降水量は平年並と予想されており、平年並の発生量が見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 育苗期間中、罹病性品種については、下記の薬剤を定期的に散布する。なお、薬剤散布にあたってはクラウン部分、葉柄、托葉、ランナーにも薬液が付着するように丁寧に散布する。下葉かきによる傷口、ランナーの切り口などからも感染するので、下葉かきの直後にも薬剤散布を行う。育苗初期の防除を徹底し、発病株は除去する。

イ 育苗初期は、保菌(潜在感染)している可能性があるため、アミスター20フロアブル2,000倍液、ゲッター水和剤1,000倍液およびバイコラル水和剤2,500倍液などを散布する。なお、アミスター20フロアブルには薬害が出やすいため、展着剤は加用しない。

ウ その後の散布薬剤は、ベルコート水和剤1,000倍液、デランフロアブル1,000倍液、アントラコール顆粒水和剤500倍液、ジマンダイセン水和剤600倍液などを用いて、7~10日間隔で予防散布する。

3 アブラムシ類

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 6月下旬現在、県予察ほ場（東伯郡大栄町）に設置した黄色水盤における有翅アブラムシ類の飛来量は、平年並である。

イ 現地のイチゴ育苗床における発生量はやや少ない。

ウ 気象予報によると、向こう1か月の気温は高く、降水量は平年並と予想されており、平年並の発生量が見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

薬剤はスミチオン乳剤2,000倍液、ベストガード水溶剤2,000倍液などを散布する。

4 ハダニ類

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 6月下旬現在、イチゴ育苗床における発生量は、平年に比べてやや少ない。

イ 気象予報によると、向こう1か月の気温は高く、降水量は平年並と予想されており、平年並の発生量が見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 畦畔雑草に対し、ハービー液剤200倍液を散布し、除草に努める。

イ 発生初期からニッソラン水和剤2,000倍液、オサダンフロアブル2,000倍液などを散布する。発生が多い場合はコロマイト水和剤2,000倍液などを散布する。

[ナガイモ]

1 炭疽病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 6月の降水量が少なかったため、6月下旬現在の発生量はやや少ない。

イ 本病は降雨によって発病が増加する。

ウ 気象予報によると、向こう1か月の気温は高く、降水量は平年並と予想されており、平年並の発生量が見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 肥料切れしないように適度な追肥を行う。

イ 7月の薬剤防除には、ベルコートフロアブル、ダコニ-ル1000の1,000倍液、ジマンダイセン水和剤600倍液などを予防散布する。

[おしらせ]

農薬は、農林水産省の登録番号のあるものを、ラベルをよく読んで使いましょう。
詳しい内容は、独立行政法人 農薬検査所の「農薬登録情報検索システム」から検索できます。(<http://www.acis.go.jp/>)

農薬の使用に当たっては、農薬使用基準を遵守しましょう。

< 鳥取県病害虫防除所ホームページ >

アドレス <http://www.jppn.ne.jp/tottori/>

病害虫の発生予察情報、現地巡回調査結果などの指導情報、病害虫の診断方法などの情報をお知らせしていますので、ご利用下さい。

鳥取県病害虫防除所

〒680-1142 鳥取市橋本 260

TEL : 0857-53-1345、FAX : 0857-53-5647

E-mail : byogaichu@pref.tottori.jp 又は kttr0301@sp.jppn.ne.jp

次回の予報発表は、8月4日(木)の予定です。